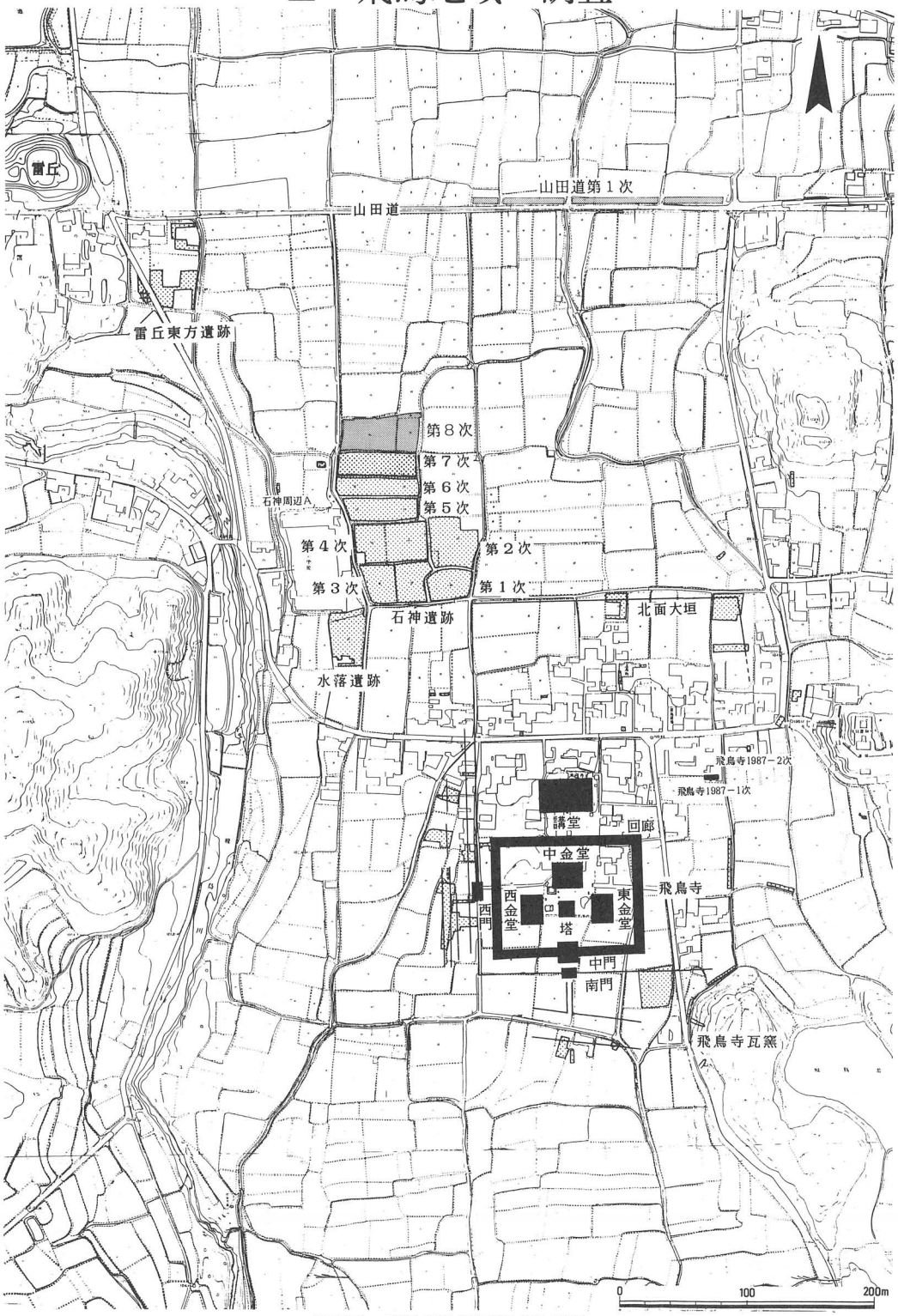


第23図　石神遺跡周辺調査位置図

1．　石神遺跡第8次調査

（1988年7月～1989年3月）

1981年以来毎年実施してきた石神遺跡の発掘調査は今年度で8回目を数えるに至った。水落遺跡の東北から調査を始め、順次北へと進んできており、今回対象としたのは第7次調査区の北に接する水田2枚である。面積は約1450㎡、第1次調査以来の調査総面積は約9250㎡に達した。その結果、石神遺跡はさらに北方へと続くが、今回調査区の半ば付近で南から展開してきた区画が一応完結することが判明した。また、従来その区画の西外郭施設かと考えていた長廊状建物もほぼ同位置で終わって北側に西へのびる東西棟が建ち、これらが西側の別の区画の東および北を区画する施設であることも明らかとなった。そこで、第8次調査の成果をあらまし報告した後に、第1次調査以来の検出遺構について中間的なとりまとめを行っておくことにしよう。

遺　構

調査区の基本的な層序は、上から耕土、床土、赤褐色粘質土、褐色砂質土の順で、その下が遺構検出面となる。調査区東半では小石混じりの砂質土が、西半では黒褐色の整地土が主として遺構面を形成し、東3分の1ではすぐ下が褐色砂礫の地山になるが、以西の地山がだんだん下がり、したがって整地土層が徐々に厚くなる。調査区東西両端での遺構検出面の比高差はあまりなく0.2～0.4m程度であるが、地山の比高差は0.6～0.7mとかなり大きい。

検出した遺構は7世紀前半から中世にかけての時期のものである。主な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭に属し、重複関係や造営方位の違い、柱穴の掘り込み面や埋土の状況、出土遺物などによって、大きく次の4時期に分けて理解してきた。A期――7世紀中頃（斉明朝）、B期――7世紀後半（天武朝）、C期――7世紀末（藤原京期直前）、D期――7世紀末～8世紀初頭（藤原京期）である。今回の調査によって、B・C両期を一体として捉えたほうが的確ではないか、とする考えが浮上してきた。すなわちB・C両期を区分した理由としては、互いに重複する遺構があること、造営方位に差があること、B期に

総柱建物が多くＣ期に小規模な南北棟が多いこと、および柱穴等の埋土に違いが認められることの４点であった。しかしながら、重複はごくわずかで、同一時期内の改作とみても支障はなく、方位の振れも各期内でさえ一定しない。しかもＢ・Ｃ期に分割すると建物がまばら過ぎるのである。今後はＢ・Ｃ期をまとめてＢ期とし、従来のＤ期をＣ期と呼び直すことにしたい。

Ａ期　飛鳥寺と水落遺跡の北方に東西大垣ＳＡ600を作り、これを南限とする石神遺跡の広大な区画が形成された時期である。遺構はほぼ真北に沿って造営されている。掘立柱建物の柱を立てた後に整地したため、整地土で覆われた柱掘形が多い。抜取りに際しては、柱をまっすぐ上に引き抜いた後黄色の山土で丁寧に埋め戻しており、整地土上面で抜取穴がくっきりとみえる。掘立柱建物８棟、石組溝７条、素掘溝３条、２種の石敷などがある。

前回の調査まで、Ａ期の遺構は、第４次調査区の石敷を巡らした井戸ＳＥ800から北へ延びる石組溝の変遷などを手がかりにして、Ａ－１期、Ａ－２期、Ａ－３期の３小期に細分してきた。今回、Ａ－２期よりは古くＡ－１期より新しいと考えざるを得ない遺構をいくつか検出した（調査中は「Ａ－1.5期」と仮称）。新たな細分法を設定する必要があろうが、出土遺物の検討を経ておらず、また遺構は溝に限られ建物等の構築物はないので、ここでは従来の時期区分を踏襲し、Ａ－１期に含めて扱うことにする。

〔Ａ－１期〕石組溝と素掘溝あわせて６条がある。　ＳＤ1210は調査区中央やや西寄りにある南北石組溝である。Ａ－２期以降の遺構を掘り下げた段階でその一部を検出したにすぎないが、人頭大の河原石を積んだ内法幅0.2～0.3ｍの狭い石組溝で底石はない。このＳＤ1210は第６次調査で初めて検出したもので、側石が３段まで遺存しており暗渠であろうと考えたが、今回は底の１段が残るのみであった。幅が狭いため水があふれたようで、溝の上端より上まで砂が堆積していた。

ＳＤ1328は調査区中央やや西で、整地土を下げてその一部約７ｍを検出した、東北へ向かって斜行する溝である。幅1.0ｍ・深さ0.5ｍほどで、もとは石組の護岸があったようだがすべて抜き取られており、底石はない。底部で前述の

ＳＤ1210がみつかった。

ＳＤ1345は調査区中央で、土坑の底で一部分を検出した南北石組溝。底での幅1.3ｍ・深さ0.6ｍの掘形内に人頭大の石を３段以上、上幅が広くなるように積んである。開渠であろう。すぐ西にあるＡ－２期の暗渠ＳＤ900より古い。

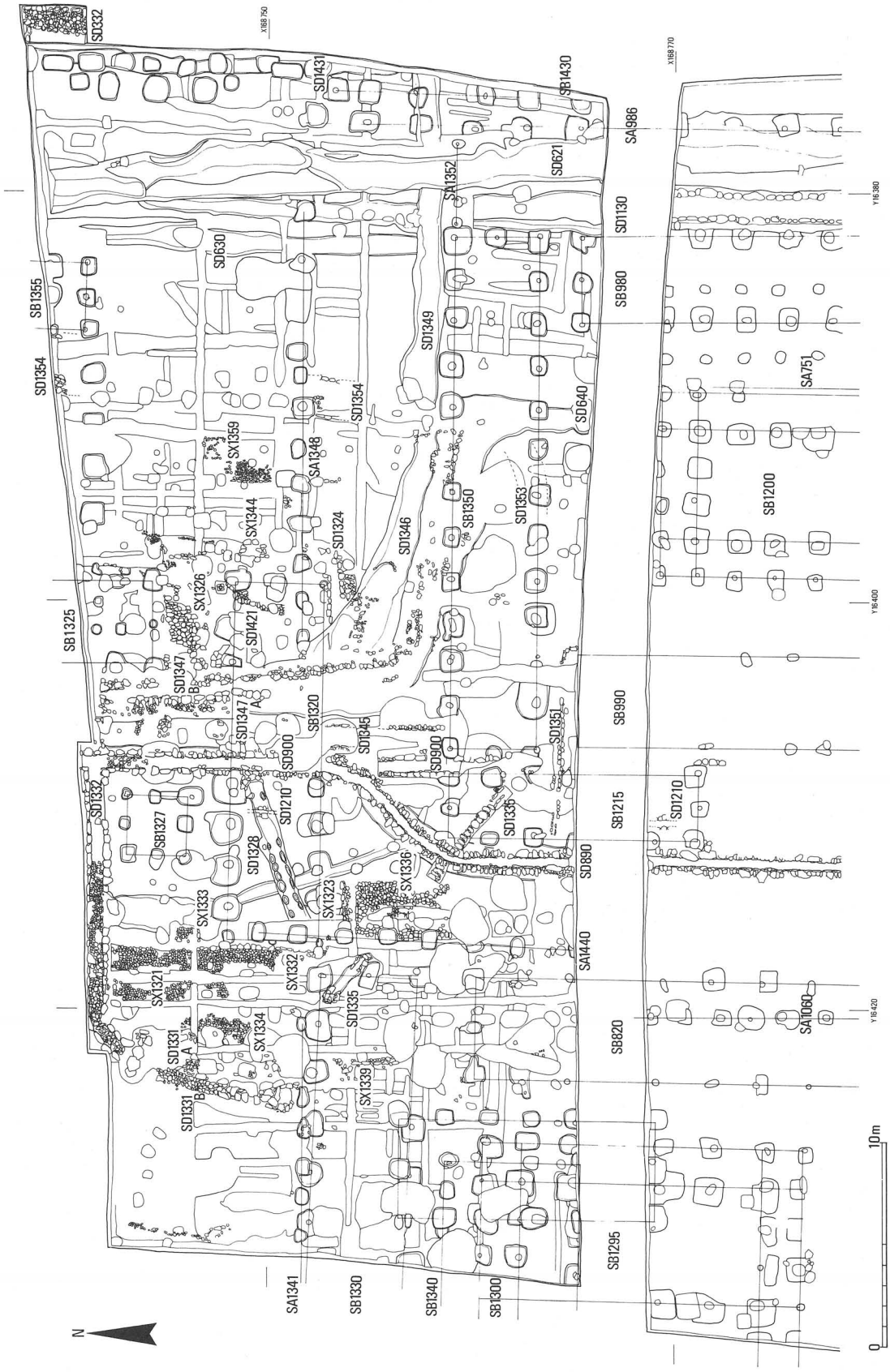
ＳＤ1421はＳＤ1345の東方でだめ押し調査中にごく一部がみつかった南北方向の石組溝。内法の上幅が２ｍ、底で1.4ｍを超える大規模なもので、開渠と考えられる。西岸にのみ石積み護岸がのこっていた。北でやや東に振れる。

ＳＤ1353は南端で２箇所にわたって検出した東西方向の溝。北肩のみの検出のため幅は不明、深さ0.7ｍ内外で、検出した範囲内では側石等の施設はない。東北方に南北溝ＳＤ1354があるが、両者の埋土は類似しており、あるいはＳＤ1353が北に折れてＳＤ1354へと連なっていたのかもしれない。ただし、ＳＤ1354には石積みの護岸がある。掘形の幅2.5ｍ・深さ0.8ｍで、人頭大の石積みの基底部だけが残る。底での内法幅1.6ｍ。

〔Ａ－２期〕石組溝ＳＤ900、掘立柱建物ＳＢ1320と周囲の石敷ＳＸ1321・1323、雨落溝ＳＤ1324および掘立柱建物ＳＢ1340などがある。

石組溝ＳＤ900は井戸ＳＥ800から発して調査区中央を縦断する南北方向の暗渠。幅約３ｍの掘形内にひとかかえ以上もある河原石を積み重ねて側石としたもので、深さ1.2ｍ、溝底での内法幅0.6ｍ、底石はない。蓋石はすべて抜き取られていた。なお、Ａ－３期に西方の石組溝ＳＤ890に付け替え、ＳＢ1350を建てたため、南半は壊されていた。

この石組溝ＳＤ900を軸線にして東西に振り分けた形で調査区北半に東西棟建物ＳＢ1320が建つ。桁行９間（柱間2.0ｍ等間）×梁行２間（柱間2.1ｍ等間）で、一辺1.1～1.5ｍほどの大型の掘形を持ち、柱はすべて抜き取られている。東西の妻柱は抜取り穴を検出しただけである。西側には石列ＳＸ1322で見切った外側に石敷ＳＸ1321・1323等が広がる。西南方に南北方向の石列ＳＸ1339が一部遺存しており、ＳＸ1322との間は幅約5.2ｍの石敷通路となっていたと理解することもできよう。東南隅では石組東西溝ＳＤ1324が北へ曲がるようなので、南辺・東辺は雨落溝で画し、外側を石敷としていたらしい。建物中



第24図　石神遺跡第８次調査遺構配置図（１：300）

央を暗渠ＳＤ900が貫通するのであるから、石列内は基壇状に高まっていたものと思われる。ＳＢ1320の東妻に柱筋を揃え北側に南北棟建物ＳＢ1325がある。今回はその南端２間分を検出した。柱間はＳＢ1320と同じく桁行が2.0ｍ、梁行が2.1ｍ等間である。

石組暗渠ＳＤ1335はＳＢ1320の西南方から東南に向い、調査区南端近くでＳＤ900に注ぎ込むと思われる全長9.2ｍの斜行溝である。一部に蓋石が遺存する。両溝の取り付き部が攪乱されているため、同時に存在したかは判断できないが、Ａ―３期の石組溝ＳＤ890や石敷ＳＸ1336より古い。深さ0.4ｍ、溝底での内法幅0.2ｍ。西北端には盲暗渠風に小石をつめてあるので石敷面の雨水を受けＳＤ900へ注いだものと考える。

ＳＸ1344はＳＢ1320の東にある人頭大より一回り大振りの塊石を径1.2ｍほどの円形に並べた遺構。外回りに面を揃えており、なんらかの台座かとも考え得る。西３分の１は石が失われているのでこの部分を掘り下げたが、導水等の施設は見つからなかった。

ＳＸ1359はＳＢ1320の東方にある南北方向の石列である。東側に礫敷を伴う。

ＳＢ1340は調査区の西南隅で検出した掘立柱建物で、南北３間、東西３間以上の東西棟と思われる。柱間は桁行1.8ｍ等間、梁行北１間1.8ｍ・南２間2.4ｍ。梁間２間で南北両庇付建物の可能性もある。柱掘形は一辺１ｍ内外とやや小振りで、Ａ―３期のＳＢ1300に切られている。

〔Ａ―３期〕この地がもっとも整備された時期である。Ａ―２期以前の遺構を一部は利用するがほとんどを廃し、大規模な整地を伴う計画的な造営を行っている。掘立建物ＳＢ980・990・1350と1300・820・1330、石組溝ＳＤ890・1351などがあるが、調査区中央の石組南北溝ＳＤ890を境に東・西の２区画に分けられる。

石組溝ＳＤ890はＡ―２期の石組溝ＳＤ900を廃して西へ付け替えたものであるが、東側の長方形区画の西南隅を迂回するようにして北へ延びている。そして区画が閉じた今回調査区の中程で再び東へ折れ曲がり、もとのＡ―２期の溝ＳＤ900へと連結している状況が判明した。溝ＳＤ900の位置ではＡ―３期

の建物群建設の妨げとなるために西へ迂回したのである。ＳＤ890の掘形は幅約1.6m、両岸に人頭大の川原石を積み上げるが、前のＳＤ900より石は小振りでしかも積み方も乱雑である。底石はない。深さ１ｍ・内法幅約0.4m、南方で一部蓋石の残った箇所があり、暗渠と考えられている。

＜東の区画＞ＳＢ980・990は同一規模の長大な南北棟建物で16.8m隔てて東西に並ぶ。第５次調査区の北端で南妻を検出、第６・７次調査区を経て北へ延びるが、今回調査区南端でＳＢ980の北妻を検出し、桁行18間であることが判明した。西側のＳＢ990も同様と考えられる。梁行２間で、柱間寸法は2.1m等間である。

ＳＢ1350は２棟の南北棟建物の外側の側柱筋に東西両妻を揃え、１柱間分隔てて北側に建つ東西棟建物である。桁行12間・梁行（柱間2.1m等間）で、第５次調査区で検出した東西棟建物ＳＢ860と同規模である。Ａ－１期の素掘東西溝ＳＤ1353を埋め立てた上に造営されている。

これら４棟の建物は、整然とした配置をとって東西幅約25m、南北長約50mの長方形区画を形成している。そして区画内には正殿と前殿の関係にあると思われる、桁行８間・梁間３間のまわりに四面庇をもつ南北棟建物ＳＢ1200と桁行６間・梁行２間の東西棟建物ＳＢ1000が納まるのである。

石組溝ＳＤ1351はＳＢ990とＳＢ1350との間を通りＳＤ890に注ぎ込む東西溝である。ＳＢ990の東北隅に沿って南に折れるようなので雨落溝をかねた区画内部からの排水溝であろう。

南北溝ＳＤ1130はＳＢ980と1350の東沿いをそれらの柱掘形を切って走り、従来は雨落溝と考えてきたもの。そのまま北にのびてゆく。今回の調査区内では護岸施設はない。

ＳＤ1349はＳＢ1350の北沿いを通る東西溝。素掘りで、東は調査区外へとのびる。南北溝ＳＤ1130を切るが、これは掘削工程の差に過ぎず、北雨落溝とみてよかろう。西半はＣ期の溝で壊されており不明。

ＳＡ1352はＳＢ1350の北側柱筋に揃った東西塀。長さ４間で柱間は不揃い、掘形も小さい。目隠し塀であろう。

＜西の区画＞石組溝ＳＤ890の西約５ｍに南北棟建物ＳＢ820がある。これは高さ0.3ｍほどの基壇を有する梁行１間（５ｍ）の単廊とみていた建物である。前回調査までで石神遺跡の南辺を画する大垣ＳＡ600から41間分（101.5ｍ）を確認し、東側の長方形区画を囲う外郭施設ではないかと想定してきた。ところが今回北妻を検出、45間目で終わりしかも梁行２間であり、北に１間分隔てて東西棟建物ＳＢ1330が建つことが判ったのである。したがって、従来廊てみてＳＣ820としてきた遺構番号はＳＢ820に変更する。今回新たに判明した遺構の配置状況から、建物ＳＢ820は南面大垣まで達することなくある地点で終わり、北面と同じく別の東西棟建物によって区画の南面を形成していた可能性もある。

東西棟のＳＢ1330はＳＢ820の東側柱筋に東妻を揃え、柱間寸法も同規模な建物で、桁行６間以上・梁行２間である。ＳＢ820と組み合って、西の区画の北を画すと考えられる。ただし、桁行方向は西でやや北に振れている。

ＳＢ820の西雨落溝ＳＤ1080は青灰色の砂質土で埋められているが、ＳＢ1330の外側（北）では石組溝ＳＤ1331として遺存している。大型の石を敷いて底を作り、両側に巨石を立てて岸とした石組溝で、北方で東へ彎曲し東西溝ＳＤ1332へ連なる。東隣りに一部ではあるが別な底石が残っており、作り替えがあった。前者をＳＤ1331Ｂ、後者をＳＤ1331Ａとして区別する。ＡはＡ―２期に属する可能性が強い。

石組溝ＳＤ1332はＳＤ1331の水を受けて東へ流し、南北暗渠ＳＤ900に直交して注ぐ。内法幅0.6ｍ・深さ0.3ｍ。西端部の底石は大きいが、中央部では小型になり、東部ではすべて抜き取られている。両側石は巨石一石を立てたもので、もともと開渠であったとおもわれる。ＳＤ900への合流点付近は造作が雑であるが、Ａ―３期になってから付設したためと考える。

石敷ＳＸ1336は大型の石を丁寧に敷いたもので、ごく一部が遺存していたに過ぎないが、Ａ―２期のものとは明らかに違う。Ａ―２期の斜行暗渠ＳＤ1335の上を黄褐色粘土で覆った上に作られ、ＳＤ890へ向かって傾斜している。

ＳＢ1300は前回調査でその南半部を検出していた南北棟建物で、今回北半部

を検出し、桁行５間・梁行３間の身舎の四面すべてに庇が付くことがわかった。柱間寸法は桁行2.5m等間・梁行1.8m等間、庇の出1.8mである。柱掘形は長辺が1.3m以上ある長方形を呈し、きわめて大きい。南方に柱筋を揃えてやはり四面庇付きの東西棟建物ＳＢ1100があり（第６次調査)、ともに東を画するＳＢ820の西側柱からわずかに３ｍしか離れていないが、区画内の正殿および前殿相当の建物であろう。ＳＢ820の西雨落溝ＳＤ1080を埋めて建てられており、施工時期がやや遅れたようだ。柱抜取り穴に焼け土が認められるため、ＳＢ820とともに焼失したものと思われる。区画内は削平されてしまったようで、石敷は全く遺存していない。

Ｂ期　Ａ期の建物群は西方区画の焼失を機に取り壊されたらしく、その後新たに整地してＢ期の建物群が建てられる。この時期には南面の大垣をやや南に位置をずらして作り替え（ＳＡ105)、内部には総柱建物や庇のない南北棟建物が多くなるなど、前の時期と比べて土地利用の形態ひいては遺跡の性格ががらっと変わったように思われる。今回調査区ではＢ期の遺構はさほど多くなく、掘立柱建物３棟、掘立柱塀４条、石組溝１条等があるにすぎない。

ＳＡ986は調査区の東南部で検出した南北塀で、第６次調査区から続き、今回６間分を追加して計18間となった。柱間寸法は2.6m等間である。北端で西に向かって東西塀ＳＡ1348が接続する。このＳＡ1348は西方へ14間分までを確認したが、以西はＣ期の遺構で破壊され不明である。ＳＡ1341はその西延長線上に乗る東西塀で、一連のものである可能性も否定できない。６間分を検出さらに西へ延びる。ともに柱間は不揃い。これらが一連の塀であるなら、Ｂ期の区画の北辺となり、一旦閉じることになる。

ＳＢ1295は調査区西南隅にある南北棟建物。前回調査で南妻を検出しており、６間×２間に確定した。柱間は桁行2.1ｍ・梁行2.4ｍである。ＳＢ1215はその東方13m強にある南北棟建物で、同じく前回調査でその南半を確認していたもの。６間×２間で、柱間は桁行2.0ｍ・梁行1.5ｍである。

ＳＤ332は東北隅の拡張区で検出した南北方向の石組溝。第３次調査区から北へのびてきており、Ａ期に属すると考えてきた。しかし、検出面がかなり上

で、北で東へ振る特徴があるのでＢ期とみるのが妥当。

第５～７次調査で検出し旧Ｂ期に属すと考えていた２本の南北塀ＳＡ751・1060は今回みつからず、７～８次間の未掘部分で終わっている可能性が強い。

Ｃ期　南北方向の溝４条のほか多数の大小の土坑がある。溝は北で西へ振れ、柱穴と土坑の埋土に炭化物が混じる点はＢ―２期と共通する。

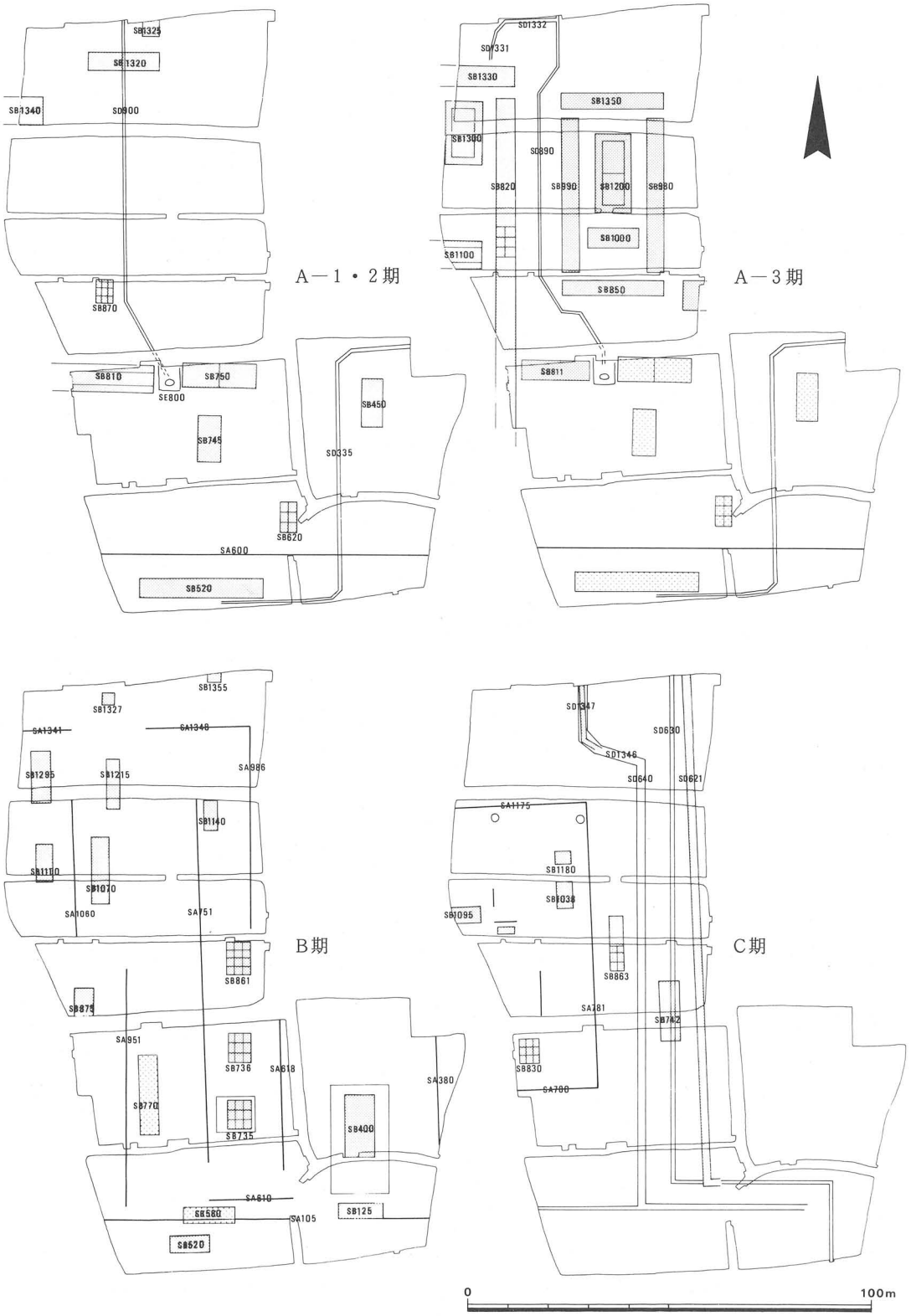
２本の南北溝ＳＤ630・640はいずれも第３次調査区内で東から延びる東西溝ＳＤ332・347から矩折れして北へ向かった素掘りの溝で、７ｍほどの間隔でほぼ並行するため、道路の両側溝であろうと考えてきた。今回の調査では、東側のＳＤ630は北へと続くが徐々に浅くなり、北端では痕跡程度となる。西側のＳＤ640は途中で斜め西へ曲がり（ＳＤ1346)、再び北へ折れて直進する（ＳＤ1347)。しかも、当初素掘りであったもの（ＳＤ1347Ａ）の砂礫層の堆積上に塊石を積んで両岸を護岸している（ＳＤ1347Ｂ)。道路遺構と見るには幅が広すぎる（調査区北端での路面幅約22ｍ）であろう。しかし、ＳＤ640が屈曲する位置は区画塀が西へ折れて閉じる状況に対応しており、この地点で道路が広がったと考えられなくもない。

ＳＤ621は両者の東方にある素掘溝で、幅を増しつつ北へと延びる（最大幅約３ｍ・深さ0.5ｍ)。

Ｃ期以降の遺構　東西、南北に縦横に走る細溝群がある。10世紀前半から14世紀にかけての土師器や瓦器を少量ながら含み、平安時代から鎌倉時代にかけて、この地域が耕地として利用されていたことを示している。

遺物

多量の遺物が出土したが、主体は土器でほかに金属製品、瓦、石製品などがある。土器は各時期の土坑や整地土から出土した土師器・須恵器（飛鳥Ⅰ～Ⅴ段階）が大半を占め、東北地方の黒色土師器が今回も数点出土した。ほかに縄紋土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器・土師器、中世の土師器・瓦器があるが、量は少ない。瓦の出土量はきわめて少なく、軒丸瓦は１点に過ぎない。金属製品には鏃・釘・鎹などの鉄製品があるが、第７次と同じく少ない。石製品には縄紋時代から弥生時代にかけての石鏃がある。



第25図　石神遺跡主要遺構変遷図

まとめ

第８次調査の成果によって、石神遺跡の遺構群についてある程度のまとまりをつかむことができるようになった。以下においては各時期ごとに配置計画について判明した事実関係をまとめておく。

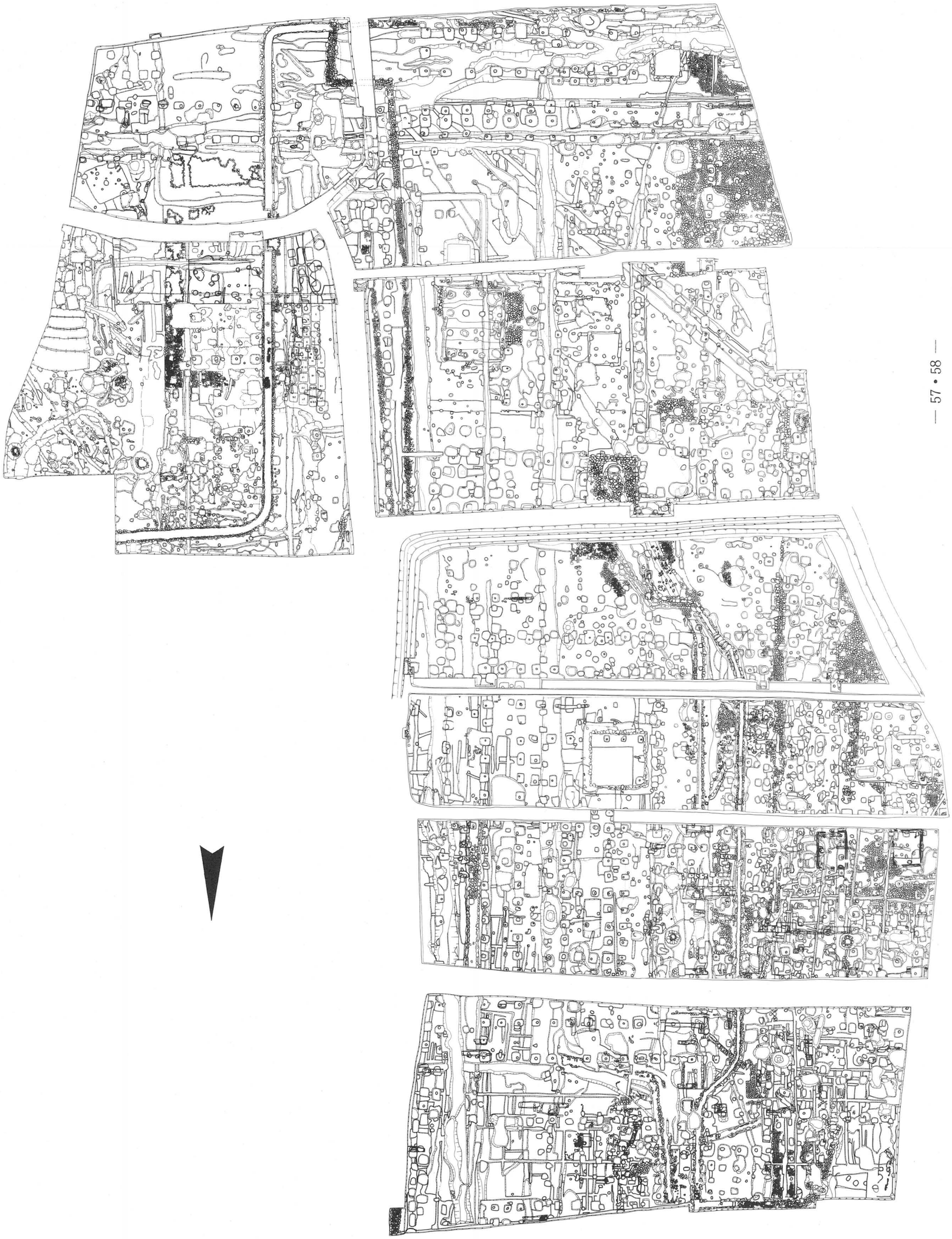
Ａ―１・２期　ほぼ中央に石敷をめぐらした井戸を中心に数棟の東西棟建物を配置する。北方にもやはり東西棟建物を主体としたブロックが形成されるが、前面と両者の間は空閑地で、大部分は広場として利用していたことになる。各建物やブロック間に規則性は見い出し難い。

Ａ―３期　南半部の井戸を中心とした建物群と広場はほとんどそのまま継承し、北半部に東西に並ぶ二つの区画が設けられる。

東区画の大きさは外周で東西24.7ｍ・南北49.4ｍ、すなわち南北長が東西幅の２倍である。24.7ｍは高麗尺70尺（１尺＝0.353ｍとして）に相当する。したがって、東区画は東西70尺×南北140尺の大きさとなる。南面大垣ＳＡ600から東区画の南辺までの距離は61.7ｍを測る。これは高麗尺に換算すると175尺、すなわち70尺の2.5倍となる。同じく区画内の２棟の建物のうち前殿ＳＢ1000の南側柱筋までは210尺である。このようにみてくると、東区画には70尺の半分35尺を基本単位とする配置計画があったように思われる。

では西区画はどうだろう。まず南面大垣から北面のＳＢ1330の北側柱筋までの距離は118.0ｍを測り、高麗尺の333尺すなわち9.5単位分となる。ところが、東・西両区画の間隔は11.1ｍで、高麗尺31.5尺と端数が生じる。35尺方眼に直すと0.9駒分である。しかしながら、長廊状建物ＳＢ820等の柱間が高麗尺に則っている点や、石組溝ＳＤ890が両区画のまさに中央を北流している点からみて、東西両区画が統一した計画に基づいて配置されたことは確かなことと思われる。なお、西区画内部の２棟の建物ＳＢ1100とＳＢ1300とは上の配置計画に合致しない。施工時期が若干遅れたことと関連するのであろう。

Ｂ期（従来のＢ・Ｃ期をまとめた時期）　南面大垣をやや南にずらして建て替え、数本の南北塀によって細長い空間を形成し、その中に建物群を配置する。建物はいずれもＡ・Ｂ期に比して小規模で、庇なしの南北棟および総柱建物が



第26図　石神遺跡全体図　（1：500）

多い。東の区画南部には周囲に石敷きをめぐらせた大規模な南北棟建物が建つ。中央区画には3棟の総柱建物ＳＢ735・736・861が東側柱筋を揃えて建ち、その北には南北塀ＳＡ986が延びる。西側の区画には南北棟が多いが、規格性は読み取れない。なお、東西塀ＳＡ1348・1341が今回調査区中央を横断しており、ここで石神遺跡内の一つの区画が完結しているとみることができよう。

Ｃ期（従来のＤ期）　西寄りに掘立柱塀で囲んだ矩形の区画があり、東側に3条の南北溝が並ぶ。方位の振れに2種があり、また溝にも素掘りから石組への改修の形跡があるので、2小期に細分できる。

Ｃ―1期にはＳＤ630・640を両側溝とする道路遺構がある。溝心心距離で7.5ｍ幅。第3次調査区で南端を検出しており、その総長は130ｍをこえる。

Ｃ―2期には東側溝を東に移し（ＳＤ621)、西側溝を石組に改修している。そして西方に掘立柱塀で囲んだ区画を設けた。区画の大きさは南北70.6ｍであるが、これは高麗尺の200尺に相当し、大枠の配置計画が高麗尺でなされていると考え得る。内部には小規模な建物5棟、短い塀4条と井戸2基があるが、東北部の建物2棟ＳＢ1180・1038が柱筋を揃えている以外に配置の規則性は認められない。なお、ＳＤ640は区画に沿って北流し区画の東北隅で一旦西へ折れるが、この状況は区画塀のあり方と対応しており、計画的な仕事と思われる。

以上のように、石神遺跡では南面の東西大垣から北へ約130ｍまで調査が進み、遺跡は北へ続き、さらに西方へも展開することがわかってきた。一方、建物群や塀で囲んだ重要な施設はＡ～Ｃ期を通じて、多少位置は異なるが、今回調査区半ばまでで一旦終わっていることも明らかとなった。また、わずか半世紀の間に幾度もの造り替えや改修が繰り返されたのであるが、大がかりな改作の前後では遺構の状況が一変しており、この地域の性格ががらっと変わったことを物語っている。これまで明らかになった遺構のあり方は、宮殿や官衙あるいは居宅などとは異なる特殊なものであり、その性格については今後の調査の進展に期さねばならないところである。特に、Ａ―3期の西区画は東のものより大規模と思われ、その究明が大きな課題として浮上してきたと言えよう。

2.　その他の調査概要

a　石神周辺Ａの調査

（1988年３月）

この調査は明日香村立飛鳥幼稚園施設改善工事に伴う事前調査として明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は石神遺跡の西方にあたり、飛鳥川が形成した谷地形の東岸に位置している。

調査区の層序は、基本的に盛土、耕土、床土、暗褐色土、含炭褐色土、淡褐色砂質土の順であり、遺構は淡褐色砂質土上面で検出したが、全体に土層は一定しない。調査の結果、７世紀代とみられる柱穴２を検出した。

この柱穴は調査区の南寄りに南北に並んでおり、柱の間隔は2.05ｍあった。石神遺跡の各期の遺構と同様に、藤原宮期の遺物を含む含炭褐色土層下で確認できたので、石神遺跡と一連の遺構と考えてよいだろう。

なお、柱穴のすぐ西側は、飛鳥川へ向かって急激に下がっており、これ以西に古代の遺構面は続かない。

b　飛鳥寺の調査（1987―１次）

（1988年２月）

この調査は史跡飛鳥寺跡における農小屋改築に伴う事前調査として行ったものである。当該地は飛鳥寺境内東辺、講堂の東約90ｍを隔てる。東西12ｍ・南北３ｍの調査区を設定した。調査区の基本層序は上から耕土、床土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土となる。

地表下約0.8ｍの褐色土上面で東西石組溝１条、瓦敷および瓦組１基などを検出した。

石組溝ＳＤ710は内法幅0.2ｍ・深さ0.2ｍで人頭大の河原石一段を並べて側石とする。底石はなく流砂の堆積が認められた。側石の据え付け掘形はなく褐色土の整地と同時に据えたものである。溝心から1.8ｍ南には径0.5ｍほどの河原石があり、やはり褐色土に据えている。礫石の可能性も考えられるが関

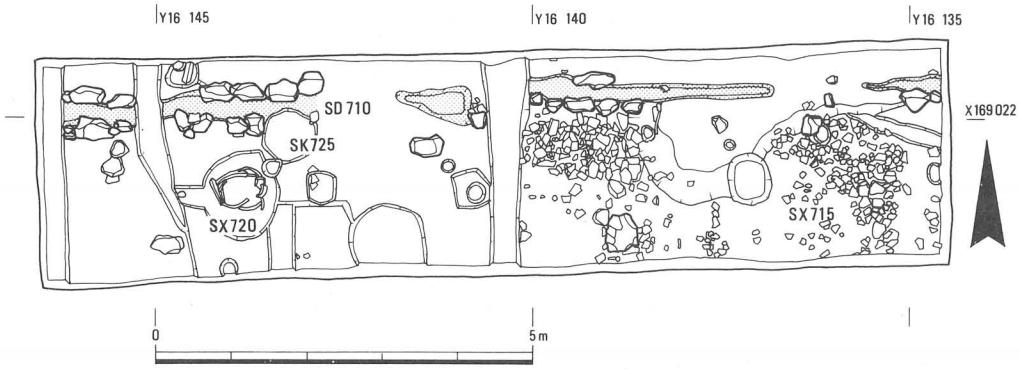
連する遺構が残っていないので、その性格は不明である。

調査区東半では石組溝の南側に瓦敷ＳＸ715が残る。平瓦片の凸面を上面に揃えて、褐色土上面に据えたもので溝の側石および礎石かと考えられた河原石に密着しており一連の時期の遺構とみられる。調査区の西よりでは径１ｍほどの円形掘形に据えた瓦組遺構がある。東西0.8ｍ・南北0.4ｍ・深さ0.4ｍの穴の側壁に平瓦を主体として垂直に立て並べている。底には河原石が詰まっており、これは裏込めの石が落ち込んだものと考えられる。遺構の性格は不明だが、瓦組の上端は溝の側石とほぼ面が揃っているので、同時期とみられる。

そのほか新しい時期の遺構には素掘溝５条、瓦溜りＳＫ725、土坑・小穴多数があり、埋土は上層の黒褐色土および暗褐色土に類する。

褐色土には瓦や土器を含む。土器は７世紀を主体とするが８世紀のものも含む。暗褐色土には10世紀初頭の土器を含み、黒褐色土および素掘溝や小穴の一部からは黒色土器が出土した。したがって、石組溝、瓦敷、瓦組の存続年代は奈良時代から平安時代初頭にかけてと判断される。調査区中央の南北溝底でさらに下層に溝状遺構のあることを確認したので、遺構の少ない南側で褐色土を一部掘り下げて調査したが、下層遺構はここではみつからなかった。

出土遺物には多量の瓦、土器などがある。軒瓦には軒丸瓦15点、軒平瓦２点があり、飛鳥寺創建時のものから藤原宮期にかけてのものまである。瓦組からは「女瓦」、瓦溜りからは「□僧□□□」の箆書のある平瓦が出土した。土器には、土師器や須恵器のほかに緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器を含む。そのほ



第27図　飛鳥寺1987－１次調査遺構配置図（１：100）

かに硯、砥石、凝灰岩切石が出土した。

飛鳥寺寺域東辺部に関しては、従来から現状変更に伴う調査を各所で行っているが、小規模調査でもあり寺に関連する明確な遺構を見いだしていない。今回検出した石組溝、瓦敷、瓦組は創建時に遡るものではないが寺域東辺の様相を知る手がかりを得た。なお、調査区の西方約30m余りの所では土木工事の際たまたま石組溝が発見されており（飛鳥寺発掘調査報告）、今回検出した石組溝のほぼ西延長線上にあたることは考慮されよう。

c　飛鳥寺の調査（1987―２次）

（1988年２月）

この調査は飛鳥寺東北方、飛鳥座神社前の東西道路の南側において、農小屋新築に伴う事前調査として行ったものである。当該地は1982年度調査で確認した寺域東北隅からやや東に振れて南に延びる東面大垣（概報13）の延長線の内側に隣接する。調査地の基本層序は上から表土0.6m、灰褐色土0.5m、黄褐色土0.1m、暗褐色土0.6mとなる。黄褐色土上面で中世の東西小溝３条および南北小溝１条を検出した。暗褐色土からは７世紀代の土器および瓦が出土したが、この時期の遺構は検出されなかった。

d　奥山久米寺の調査（1988―１次）

（1988年８月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で行ったものである。調査地は、奥山久米寺の推定寺域の北半に位置し、東西2.5m・南北1.8mの調査区を設けた。調査区の西端で柱穴１を検出したが、敷地の関係でそれ以上の追求はできなかった。

e　川原寺の調査（1988－１次）

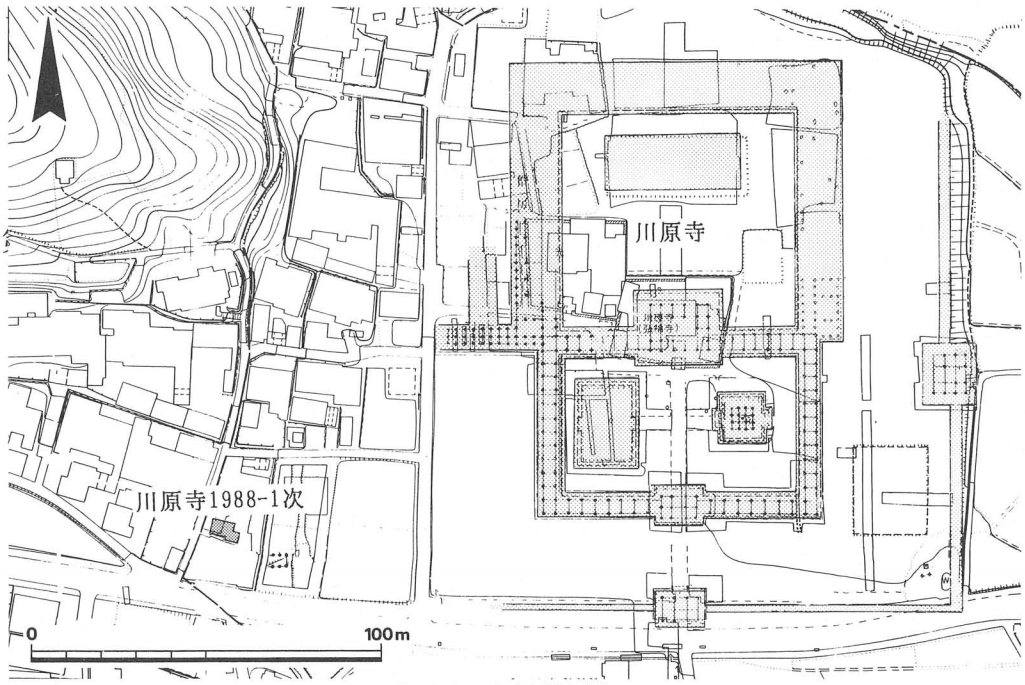
（1988年10月）

この調査は、住宅改築に伴う事前調査として明日香村川原で行ったものである。調査地は寺域南西部の丘陵裾に位置し、1979年度調査区の西にあたる。調査は東西６ｍ・南北５ｍの発掘区を設けて実施し、南東部の一部を拡張した。調査面積は約40㎡である。

調査地の層序は、上から耕土、床土、黄褐色粘質土、花崗岩風化土の順で、遺構の大部分は花崗岩風化土上面で検出した。

検出した遺構には、窯状遺構１基、土坑４基、東西溝１条がある。

窯状遺構は天井部が削平されているが、底部の断面が浅いＵ字形を呈し、長さ約2.5ｍ・幅約0.25ｍ・深さ約0.12ｍである。南端が焚口で、中央部分が最も火を受けて赤変しており、北端には赤変部が認められない。窯体内には多量の木炭と、暗青灰褐色に固く焼けた窯壁が堆積しており、また13世紀頃の瓦器、土師器小皿、羽釜の小片と、焼けた獣骨片が少量出土した。この他に検出した土坑や溝も同時期の遺物や焼土を含み、窯状遺構と一連の施設と思われる。



第28図　川原寺周辺図

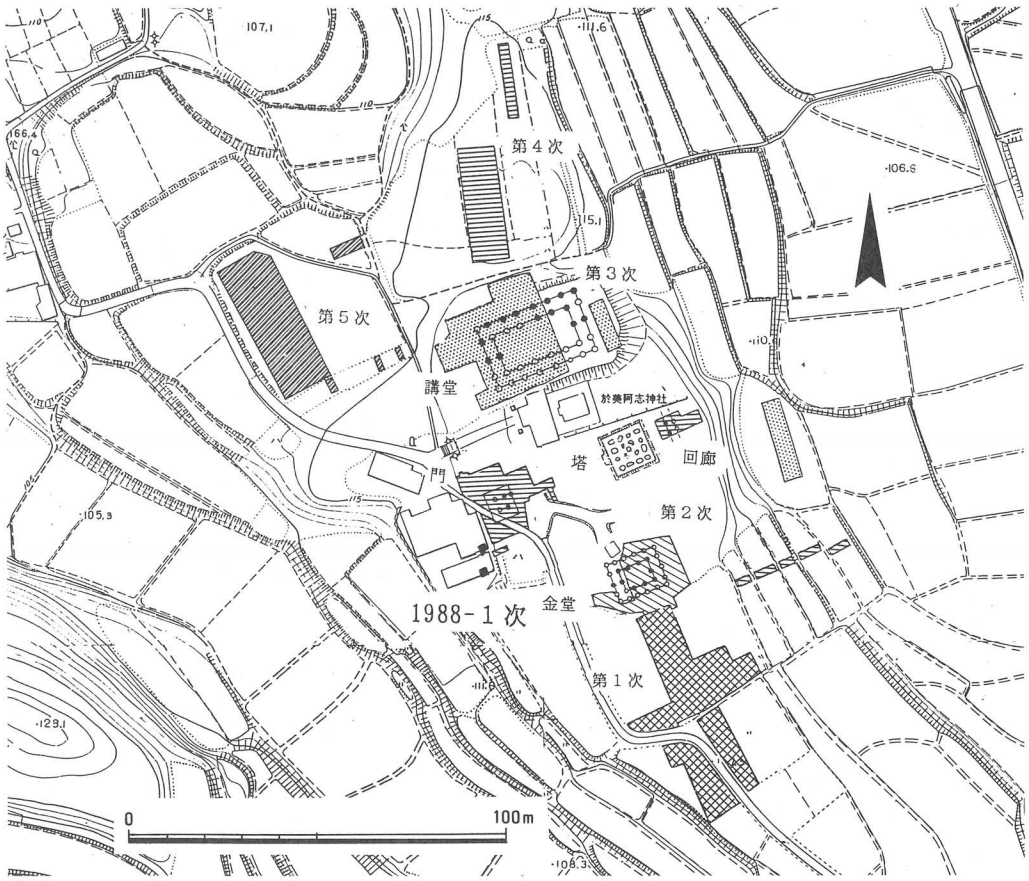
f　桧隈寺の調査（1988－１次）

（1988年５月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は1982年に明らかになった西門基壇（塔跡の西方にある小基壇）（概報13）に道路を隔てて接する宅地で、西門に至る参道などの存在が想定された。東西２ｍ・南北３ｍの北区と一辺２ｍ四方の南区の２つの調査区を設定し、調査した。

北区では宅地造成に伴う盛土の直下が山土の地山となる。南区でも盛土直下に旧地形の傾斜面に沿いながら南に落ち込む同様の地山を確認したのみである。各調査区とも遺構は検出されなかった。

境内地であるにもかかわらず、桧隈寺に関わる遺構は全く検出されておらず、この地区は後世に大規模な削平を受けた可能性が高い。



第29図　桧隈寺周辺図